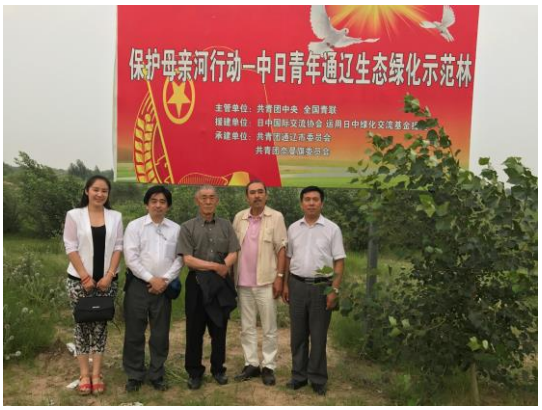
日中緑化交流助成事業のレガシーとなる記念事業を求める

一般社団法人日中国際交流協会
理事長　長谷川隆淑

弊協会は、今年も継続して内モンゴル通遼市（奈曼旗）で６７ha、４万５千本の植樹と黒龍江省チチハル（碾子山区）で 30ha、３万８千本の植林プロジェクトの助成事業を実施しています。



思い起こせば、10 数年前の発足時には、弊協会の関係 20 数名・北京の全青連から 10 数名が飛行機で現地へ乗り込み、地元青年団組織と彼等が動員した地元ボランテア（小中高校生）が参加し、植林予定地の山野で色彩豊かなバルーン・幟や記念碑を囲んで総勢 4~5 百人が集まった壮大な植林記念キャペーンを度々経験しておりました。しかし、その後はこのような植樹式典を縮小し、緑化植林効果の向上を第一として実質的な仕組みと方策を取り入れ、森林の造成に重きを置き、より簡素で合理的に活動へとシフトし今日に至っています。

弊協会には、半世紀を超す経験と実績を持つ著名な造園師（日本庭園）が副理事長として、彼が直接指導したベテランの林業技術者集団が育成されています。この度も小人数（4 名）の現地訪問でしたが、専門的な現場視察と中身の濃い協議が出来、活着率の向上や樹木の保護育成に有意義な訪問交流であったと評価されています。

片や、故小渕恵三総理の肝いりで、平成 12 年から始まった「日中緑化交流基金 100 億円」による植林助成金交付事業も既に 17 年目になり、累計で 70,000ha 近くの地域で日中民間の協力による緑化植林が成功を収め、黄砂の発生や辺境の砂漠化を防ぐなど、中国及び日本の自然環境改善に大きく貢献したと高く評価されています。しかし、当初の資金もこれまでの 17 年間の事業遂行で消費され残り少なくなり、ここ 2~3 年後には事業の収束が予想されています。

筆者は、中国側の国家林業局や全青連組織と日本側の日中緑化交流基金はじめ関係の日中友好団体が長期間に亘り誠実に進め、北東アジア地域の自然環境保護に多大な成果を上げた植林助成事業を重く顕彰し、日中両国民間人の貴重なレガシーとして末永く記録・記憶にとどめるべきと思います。故に日中緑化交流基金及び関係省庁に対し、これまで輝かしい成功を収めた「植林助成事業の有終の美を飾る記念イベント」を是非とも企画･実施されることを進言させて頂きます。関係各位のご賢明なご決断をお待ち申しています。